

# 「道徳の時間」の充実に向けて

「道徳の時間」には、様々な教材が使われています。読み物としては、文部科学省発行の「私たちの道徳」、福島県教育委員会発行の「ふくしま道徳教育資料集」が、県内全域で活用されています。

「ふくしま道徳教育資料集第Ⅰ集～第Ⅲ集」は、平成24年から3か年かけて作成されました。この資料集は、道徳の教材としてだけでなく、震災後の本県の実情を伝える資料としても活用できる内容になっています。\*福島県教育庁義務教育課のホームページからダウンロードすることもできますので、ぜひご覧ください。



「私たちの道徳」



「ふくしま道徳教育資料集」

## 「外国からのメッセージ」

2011年3月11日、日本列島を大きな地震がおそった。

わたしたちの町では、こわれた家はあったが、幸いなくなった人はいなかった。しかし、水道がこわれたり、食べ物も買えなかったり、しばらくつらい時期が続いた。

そんなある日、わたしはインターネットであの写真を見た。それは、外国の子どもたちが、日本のためにいのりをささげている写真だった。

「わたしたちは、あなたたちと共にいます。」

「日本の深い悲しみを、わたしたちも分かち合います。」

英語でそう書かれていると知って、自然になみだがあふれた。

「ぼくらも一年前、同じように大きな地震におそわれました。そのときから、これまで強く支えてくれたのは日本人でした。チリは日本に感謝しています。」

「台湾で大きな地震があったとき、日本が一番早く、最も多くの救援隊を送ってくれました。本当に感謝しています。今こそわたしたちが恩返しをする時です。日本、がんばれ。」

たくさんの国から、多くの人々のはげましがインターネットにあふれていた。世界中の人たちが、日本を、わたしたちを応援してくれていたのだ。

しばらくして、わたしはこんな新聞記事も見つけた。

東日本大震災について、中国のメディアは、「日本国民の『落ち着いた行動』が、中国全土に強い感動をあたえている。日本人は、なぜこんなに冷静でいることができるのか。」と報じているという内容だ。

また、他紙では、「日本人の冷静さが、世界に感がいをおあたえている。」「東京では、数百人が広場にひなんしたが、男性は女性を助け、街にはゴミ一つ落ちていなかった。」と紹介していた。

中国のテレビが、被災地に中国語の案内があることを取り上げて、「自分たちがこんなに大変なときなのに、外国人にも配りよをわすれない日本人に、とてもおどろいています。」と紹介した。その報道を見た北京市の女性は、「すばらしい。日本人の中には『道徳』の血が流れているのだと思う。」と日本の新聞に語ったそうだ。

わたしは、「『道徳』の血」と言われたことに「はっ」とした。

確かに、被害がひどい中、日本人は落ち着いて行動していた。テレビでも、家に帰れなくなってしまった被災者たちが、整列して笑顔で「ありがとう。」と言って、順番にご飯を受け取っている様子を伝えていた。

自分も被災しているにもかかわらず、がれきのかたづけの手伝いをしている人もいれば、ひなん所でおにぎりをにぎっている人もいた。家族が津波でなくなったのに、行方不明の人を心配している人もいた。

しかし、それらは、外国の人から見れば、おどろくことなのだ。

あの震災から、一年半が過ぎた。

その間に、ひなんして人がいなくなった家にどろぼうが入ったというニュースを聞いた。原子力発電所が爆発した後、福島県の人たちに対して、心ない言葉をあびせる人たちがいたことも知った。

「日本人の中には『道徳』という血が流れている」とほめてもらったが、果たして本当なのだろうか。次々と流れてくるニュースに、わたしは、日本はどうなってしまうのだろうかと考え込んでしまった。

「ふくしま道徳教育資料集 第Ⅰ集」より